碧南ロータリークラブ週報

第３１４４回例会 令和7年１０月２２日(水)

●会長 黒田 泰弘
●幹事 永坂 誠司
●会場監督(SAA) 長田 一希

■例会日　毎週水曜日　12:30　■例会場　碧南商工会議所ホール
■事務局　碧南商工会議所内　〒447-8501　愛知県碧南市源氏神明町 90
TEL<0566>41-1100　FAX<0566>48-1100
ホームページ：https://www.hekinan-rc.jp
E-mail:info@hekinan-rc.jp
■会報委員　杉浦邦彦・長田康弘・杉浦秀延

2025-2026 年度
国際ロータリー会長メッセージ

UNITE FOR GOOD
よいことのために手を取りあおう

●斉　唱

ロータリーソング「今日も楽し」

●本日のお弁当

大正館

●本日のお客様

「メッセンジャー」編集長＆シンガーソングライター　杉浦貴之様

会　長　挨　拶

岡本耕也副会長

失礼致します。

今日は黒田会長が計画的なお休みということで、私が副会長挨拶という形でやらせていただきますけれども、まずもちまして「今日も楽し」を歌う時に緊張のあまり皆さんの方にお尻を向けてしまいました。大変申し訳ございませんでした。

昨日は日本初の女性総理大臣が誕生したということで、日本全体が期待感に溢れております。そのような歴史的な時に私はここで挨拶をすることに少々不安を感じております。ご存知の通り黒田会長は毎回素晴らしく準備をされて、立派な会長挨拶をされております。歴代の会長の皆様もそれぞれ素晴らしいご挨拶をされており、そうした中で私はこうした場で話すのが苦手でして、会社の朝礼やゴルフコンペの優勝スピーチぐらいなら何とかなるのですが、ロータリーの場となるとやはり重みを感じてしまいます。

何か話さねばと思いながら、この 2 カ月ほどもやもやしておりましたが、今日のこの 5 分ほどの挨拶で解消されるのかなと思っております。そんな中で選んだテーマは「職業分類」についてです。皆さんもご存知の通りロータリーに入会するには職業が必要で、創設当時は「一業種一人」という厳格な規律があったみたいですが、現在は正会員の 10%までは同一職業で

もよいとされ、分類も細分化されております。つまり、クラブを維持するために職業の境界がボーダレスになってきているのかなと感じております。
　私のバッジの職業分類は「普通煉瓦製造」です。ただ、実を言うと今年の 8 月で製造をやめまして、現在は販売に移行しております。このクラブの中でも、そして日本でもこの職業分類で活動しているのは私一人ではないかと思います。というのも私は現在 62 歳で、日本れんが協会の会長を務めておりますが、製造メーカーは加盟外を含めても全国でわずか 6 社しかありません。その中でロータリアンは私一人です。つまり、この職業分類を持つロータリアンは日本で私だけということになります。その背景にはこの産業の衰退があります。今日はその歴史を少しだけお話しして、私の挨拶にさせていただきたいと思います。
　煉瓦の起源は紀元前 4000 年頃のメソポタミア文明にまで遡ります。当時は木材や石が乏しく、身近にある土を藁と混ぜて日干しにした「日干し煉瓦」が建築に使われておりました。「焼成煉瓦」が登場するのはその約 1000 年後、紀元前 3000 年頃のことです。シルクロード沿いの高温多湿な地域では日干し煉瓦が雨で崩れてしまうため、耐久性を高めるために焼く技術が生まれました。
　そこから日本に煉瓦が伝わったのは 1850 年頃の江戸時代末期です。当時の日本は木造建築が主流で、煉瓦はほとんど使われておりませんでした。しかし、造船所や鉄工所といった近代工業が発展し始め、オランダから技術者を招いて日本で初めて煉瓦が製造されるようになりました。これが日本の煉瓦の黎明期です。
　その後、明治時代中期になると煉瓦は大きく発展します。渋沢栄一が埼玉県深谷市に設立した「日本煉瓦製造株式会社」がその象徴であります。富岡製糸場や東京駅、軍関連施設など多くの建築に煉瓦が使われました。当時は手作業で土を型に入れて作っており、年間 5 億個以上の煉瓦が生産されていたと言われております。
　しかし、その後は衰退の道を辿ります。理由は地震に弱いからではなく、鉄筋コンクリートの登場です。早くて安い、しかも強度の高い建築が可能になり、煉瓦の需要は一気に減少しました。さらに大正時代の関東大震災では施工不良による倒壊が多発し、建築基準法も煉瓦に厳しくなりました。それ以降、建築用としては減少し、炉材など工業用途に活路を見出しましたが、近年はそれも不燃材の登場で需要が減り、ついに 115 年続いた製造をこの 8 月で終了することになりました。
　寂しい話ではありますが、皆さんの職業もそれぞれ歴史と変遷があることと思います。自分の会社や業種がどのような背景を経て今に至っているのかを改めて考える機会にしていただければと思います。以上で私の挨拶にさせていただきたいと思います。
　本日はよろしくお願い致します。

幹　事　報　告

永坂誠司幹事

　幹事報告をさせていただきます。
・ 第 4 回理事会報告につきましては、幹事報告書の通りでございます。

- 碧南高浜防犯協会連合会より「秋の安全なまちづくり県民運動の実施について（お願い）」が届いております。
- ガバナー事務所より「2024-25 年度　クラブ優秀賞」並びに「地区優秀賞」受章のご報告が届いております。

委　員　会　報　告

＜出席奨励ニコボックス委員会＞

総会員数 58 名（内出席免除者 14 名の内出席者 10 名）出席者 44 名	
出席対象者　44／54 名	出　席　率　　81.48％
欠席者 14 名（病欠者 0 名）	

＜ニコボックス＞

鈴木　泰博君　　先日、木村さんと長田さんにお世話になり、ありがとうございました。

大竹　密貴君　　１０月１９日、大浜てらまちウォーキングのお稚児さん募集では、山口日出子さんに大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

竹内　康人君　　本日の卓話講師、杉浦貴之様をご紹介させていただきます。

卓　　　話

杉浦貴之様

「命はそんなにやわじゃない　～がん余命半年から２６年を迎えて～」

「メッセンジャー」編集長&シンガーソングライター　杉浦貴之様

皆さん、こんにちは。

杉浦貴之です。シンガーソングライターとご紹介いただきましたが、今日は歌いませんので、いつかの機会に見ていただけたら嬉しいなと思います。今日はお話と最後にビデオをお見せしたいなと思います。

このような格式高いロータリークラブの卓話に呼んでいただき、本当に光栄に思っております。実は今回 2 回目で、15 年ほど前に一度お招きいただいたことがあります。まだ 30 代だったんですけれども、再びこのような機会をいただき、ありがたく思っております。今日はがんから回復してきた道のりをお話しさせていただきます。参考になるかどうかわかりませんが、こんな人間もいるということを知っていただき、皆さんの周りでがんに苦しまれている方がいらっしゃったら、少しでも希望になればと思います。

現在、私は 54 歳になりました。がんが見つかったのは 26 年前の 28 歳の時でした。税理士事務所でバリバリ働いていた一番調子の良い時に突然腎臓に激しい痛みが襲いました。緊急で病院に行ったところ、腎臓内から出血しておりました。これは血尿ではなく「腎外傷」と言

われました。特に何かをした記憶もないのに腎臓から出血して入院することになりました。

1カ月ほど藤田衛生大学病院で検査を続けましたが、原因不明のまま退院しました。ちょうどその頃、競馬の福永騎手が落馬事故で腎臓を損傷して入院されており、同じ病棟にいたことを憶えております。彼の場合は落馬という原因がありましたが、私の場合は原因不明でした。

それから 3 カ月後、念のための検査で血腫の中に隠れていた腫瘍が、花が咲くように広がっているのが見つかり、やはりがんだという宣告を受けました。がんではないと言われて安心していたところから、がんと言われた時のショックは今でも思い出せないほどの絶望でした。もう他人事のような感覚で受け止めたのを今でも憶えております。

28 歳で人生が終わりだと、奈落の底を見たような感覚でした。真っ暗闇の中にいました。しかし、ずっと真っ暗闇の中だったら、今ここにいません。手を差し伸べてくれる人、光を当ててくれる人がいました。最初に光をくれたのは両親でした。

私のがんのタイプは子供の脳にできやすい「肉腫」と言われ、全国で当時 20 例しか症例がないということでした。調べていくと 2 年以上生きている人が 1 人もいませんでした。両親は呼ばれて余命宣告を受けました。「早ければ半年、2 年後に生きている可能性は 0%です。」と言われたそうです。私は後から聞きました。

その時、両親はどういう態度を取ったかというと、ショックで泣き崩れたのではなく、バーンって机を叩いて「冗談じゃない、うちの息子は死にません。私がこの子を助けてみせます。私は余命宣告なんて絶対に信じません。私は息子の生きる力を信じます。」と言って、その「信じる」という思いを医者にぶつけてくれました。

そして、私を支えてくれる眼差しや手のぬくもりから、その思いは十分伝わってきました。「信じてるからね。何があっても守るからね」。そんな思いが毎晩伝わってきた時に本当にありがたくて、「自分ってこんな存在だったんだ。こんなに命がけで守られる命だったんだ。」と思った時にすごい力が湧いてきたのを今でも憶えております。

ある時、母親がこんなことを言ってくれました。これが私にとって一番の力になった言葉です。それが「貴之が生きててくれるだけで嬉しいよ。」という言葉でした。本当にシンプルなんですけど、その言葉を言われた時に涙が溢れて、生きる力が心の底から溢れてきたのを今でも憶えております。「人間は生きているだけでまず価値がある。」自分のことをそう思えた時にすごいエネルギーが溢れました。この感覚を持って今、小学校や中学校でも講演させてもらっております。あれが私のスタートだったなと思います。

その後、いろんな出会いがありました。その中で大きかった出会いが看護学生でした。ある時、看護学生が私にこう質問したんです。「杉浦さんの夢って何ですか？」私はそれを聞いた時に怒りが込み上げてきました。「夢？こんながん患者に夢なんか聞くなよ。夢なんか見れる訳ないだろ。」と反発しそうになったんです。「冗談じゃない。」と言おうと思ったんですが、「待てよ。がん患者は夢を見てはいけないとか、がん患者は夢を見るべきじゃないなんて決めつけているのは誰だ？」と思った時に自分だと思ったんです。勝手に自分が今までの知識で「がん患者はこうなる。」って未来を決めつけておりました。そんなふうに自分のことを過小評価して、限界を自分で決めたらあまりにもかわいそうだと思いました。

数秒後、彼女への気持ちは感謝に変わりました。よくぞ聞いてくれた。自分は今まで好きなことやってこれたか。やりたいことやってこれたか。病気が治ったら何がしたいのか。自分で問いかけたら出てきた言葉が「ホノルルマラソンに行きたい。」でした。22歳の時にホノルルマラソンに一度出たことがあって、もう1回あそこに帰りたい、あそこに行くくらい元気になりたいという思いが自分の中に宿った時、またスイッチが押されました。

それまでは「病気を治すために生きるぞ。」だったのが、看護学生が夢を聞いてくれてから変わりました。治すために生きるが生きるために治すに変わりました。この変化はものすごく大きくて、病気を治すために生まれた訳ではないし、いかに生きるかの方が大事なんだと思った時に病気を治したら何をしたい、どこに行きたいということが病院のベッドでいっぱい湧いてきました。

その中で一番大きかったのがホノルルマラソンでした。次に湧いてきたのが結婚でした。結婚も私は最初にがんと言われた時に諦めました。でもこれも自分が勝手に限界を作っていました。自分が勝手に引いたラインだったと思った時に結婚もできると思いました。

そして、ある時思い付きました。「そうだ、ホノルルマラソンに結婚する奥さんがゴールで待っていて、ゴールで抱き合って、次の日ハワイの教会で結婚式をあげよう。」と。それを思い付いた時には鼻血が出るほどワクワクして、ベッドの上で涙を流しながらそのシーンをイメージトレーニングしていました。26年前に私は病気を治すということに対してイメージトレーニングをずっとしていました。

1999年に手術をしまして、それから9年後の2008年にハワイにいました。ゴールに奥さんが待ってはいなかったんですけど、一緒に走ってくれて、最後だけダッシュして振り向いて、ゴールで抱き合って、次の日にホノルルの教会で結婚式を挙げさせていただきました。看護学生が夢を聞いてくれたおかげで、時間はかかりましたが本当に叶いました。

これを自分だけのものに留めておきたくないと思い、結婚式の翌々年の2010年から「がんサバイバーホノルルマラソンツアー」というのを作りました。がん患者さんとサポーターが支え合って、初年度100人くらい参加し、2019年のコロナ前まで続けて、全員完走しております。

今日はその中で碧南の方がエントリーされたので 少しそのお話をさせていただきたいなと思います。美容室ロペの石川利広さんです。残念ながら彼は去年の3月に心臓の病気と肺炎で亡くなられてしまいましたが、10年前に胆のうがんで余命1年と言われていました。手術もできないと言われていました。

彼は死も受け入れたんですけど、どうしても叶えたい夢がありました。それが1年後に20歳になって成人式を迎える娘さんの髪を自分の手で結いたいということでした。彼は美容師だったので、どうしてもそれまで生きるという夢がありました。死を覚悟しているが夢は叶えたいという狭間の中で、私の講演会とライブに来ていただきました。

そうしたら彼の中でスイッチが入って、「俺、生きられるかもしれない。」と思っていただけて、何かお話ししたそうだったので、壇上でお話ししてもらいました。彼はこう言いました。「僕は死ぬのを諦めました。生きることにします。」と高らかに宣言されて、すごい顔色が変わりました。

あと 1 年と言われた命だったんですけど、家族と一緒に歩いたり、食事を見直したり、いろんなことをやってホノルルマラソンと成人式で娘さんの髪を結うという夢を持って、2015 年の 12 月にホノルルマラソンをご家族 3 人で完走されました。そのシーンがビデオに収められておりますので、ご覧いただきたいと思います。

石川さんのストーリーをご覧いただきました。この時から半年後に病院に行ったら、がんはすっかり良くなっていて、がんは消えていました。余命 1 年というところからがんを克服されて、9 年生きられました。本当に彼の存在が多くの人の勇気につながっております。私もそうなんですけど、私の前を生きている人たちの生き様がすごく希望になって、本当に希望の灯火となって照らされて、そこを歩んできたような気がします。

今日、伝えたいことがいろいろ飛んでしまったかもしれないんですけど、本当に希望がすごい大きな力になります。皆さんそれぞれが誰かの希望になってほしいなと思います。こういう時代だからこそ、どう生きるかということが子供たちや周りの人の希望になると思います。一緒にそんな時を作っていってもらえたら嬉しいなと思います。

今日のお話が皆さんのどこか 1 つでも、何か希望というか参考になったら嬉しいなと思います。またどこかでお会いできる日を楽しみにしております。

ご清聴ありがとうございました。

次回例会案内

令和７年１１月５日（水）定款第７条第１節（d）（1）による休会

令和７年１１月１２日（水）クラブフォーラム「ポリオ例会」

　ロータリー財団委員長　榊原　健君